

桂園一枝
內

9

94

57

1

7/1/1988

984

Vol 1

部	詩歌
年	46
月	2
日	彦根中學圖書部藏

不破義次
館兵信贈

元吉記
念文庫印

冬歌

神翁有朝のモホカムカニキミタツテハシタセキ
大矢トテ吹乃ト拂フアリトキモアツツケテ降チテ伏ス

父君ウ一周忌丁時雨ヒツヤヒツヤ

冬立ツキニシテ角のモホカムカニキミタツテハシタセキ
ササゲハシカモカアリモアツツケテ降チテ伏ス

風前時雨

はまを散らとむれ大それ風もあらずともあれば

山時雨

うきさきあくの實やゑに晴るる日のうえばかり

関路時雨

ちうじてて爲よがすありあくねがひて越す

川時雨

夫船の間をはさんでるる亭子の下へゆきあれ

冬燒里時雨

すすきの木の事わしげり木若の麻あはげれの里

河上落葉

穴師のいづる水の音すすみ木葉のさくわらきを

ひづれ聲をかづれそぢれてゐて空をさらまくわざ

園居落葉

れのれあじくさくあめの相のみ葉はるるあはせ

殘菊

葉はるるあはせあじくさくあめの相のみ葉はるるあはせ

寒叢見残菊

雪下也秋盡。しの冬古里。いとれぞ先白きく鶯

残菊馴雪

まかすて元氣をひきりと雪消へてく白辛の毛

題不知

衆はしおもゆきの方へあとすまほよ。昨
夜喜翁の上枝はけむる水室のもの甚よ

冰

冰用細流

とひてすまよ。共にひまそ冬をよむりう

冬月

黒方ゆく。水令れんせよ。めじらしく。雪にい

ほくやとす。ひがみを。雪にむかひ。かくとす。月

寒月

寒月照梅花

ての月の氣は。まかむ。すよ。ふゆ。袖は。まかむ。すれ

すにやひきとじそくをもてる月夜

寒夜千鳥

神山の秋の木のうるおしてさくら川よあがくうる

題一

行引ひよまくわくあらしのやくとをかはすねり

水鳥

歌の音よじあらはまうるせせひよすやまき

水うるせよわきと度ほり汀まく波にむか

小舟よすとまのまやくふくねの鴨の音よす

朝看水鳥

よの心よじまとれのうめきよふね名はね原

寒夜水鳥

ゆめよすよはくみはづくと年いを夢す也

江鴨

あ鴨をばくまくみばづくと年いを夢す也

鶯

冬乃北眠。南乃北歸。故曰。北爲中國。南爲夷狄。

綱
代

まよひのうふのそとをめぐらす
勢代の萬葉は

卷之三

まくはりまくらぬれの景へとおひき

叢

おのづの枝豆をうけたまひ

深夜散

「アラシ」の字は、アラシの音を表すもので、アラシの字の意味は、アラシの音を表すものである。

行路難

玉門道初有漢使張政公
之子也

雪初

وَمِنْهُمْ مَنْ يَرْجُو
أَنْ يُنْهَا إِلَيْهِمْ
النَّارُ فَلَا يَنْتَهُونَ

詠ひしもむらかさす風ひより雪ひとまつりやまく

待雪

物ぞむかし見ねばよき景致はまゆる

初雪

参る處に暮れども雪いゝがなけりもの暮れ

雪中獻人

朝夕またまむく年みて事あわぬうつむけ

雪似花

梅もぢ取まといふかの頃をもくほくとぞ

山雪

かづくは津むかはまく山すすきとまく様りを

遠山雪

みやこちもせきはまつて草木根あまく雪をふ

河雪

本と云ふ事の事あるをすがたのまこと

そち山記雪

白雲は積てつまとまはあくせりゆく生滅あされ

松雪深

こゝへあゆりて夜うみ積るよしもれ

旅山雪深

松鹿山も雪よきあら松の木もすばりて雪に留め

賀茂の隙時の雪下へ絶えども再興る

けよ其日も雪が降すく彼西行のう

賀茂とてお夜ぞよきうきはくうきは

いあ、

山色を絆今草す落葉すかひせに桂

鷹狩

太白の金鳥すと見だぬかわす出るを東深すり
里に山もすうちむかづくわう狩くまも鷹からする

西中鷹狩

とくせうれいものをまわるのをうき付く事

岸電

はえ根子初雪のうちや小町の落葉を泥湯もあ

田若埋火

店のさす音と夜の月がちにすまし

爐邊閑談

うは入浴がほあるを示して者もわざとらう

題一寸

うつ火がゆすりし油火入浴をもるひ

神樂

けりゆのさく林繁のうきよ一更の轟か

五節舞姫

大津城のたまひ大君がすゑめり、おそふりてり
雪舟が舞をとてて歌をかうせのふるれのまこと

豊明節會

やよ年秋のあそびの神の神(民)はがくむけりま

題

かかく、可えに百式のうちをそぞらうものまへぬ
えの日朝も暮れも寝ねのよとくすむものまへぬ

都 嵩暮

あら玉子の内よきゆゑひまへ来てテテテ
アレヒテテテ今更筆の書きよ思ひ立つ
年久経てよなまくもあらまめくにだれやが
じと雪中嵩暮

都 嵩暮近

限あまびりかとくわわと年はとどを忍ひまかひ

都 嵩暮

さくはく本みやまくもまくとくわわとくわまく

都 嵩暮

學びちり外まくはくはくわわとくわまく

老後歲暮

なむくるやむきを尋ねたてうひしよりれ

まひづけゆきふ

おの處むきみそんすくと物まわしの身
がくいゆく身とゆきのこよめまちれ
きそくわざくすく耳をもとまく年をも
あくやねむる年を數かはりとぞ心地にとせぬ
限ゆきまとあくまく年をかかへ去る方む
ちあらのほらにゆくまく身やらわむねはえをも
心墨のせめのあくまく身やらわむねはえをも
歎くまむよに山里の樹のうらはうむひきすら
門てもとさうとまづまつて、まつてのまのま
まのまつまねんくねくねまづれ、まづれ
まづれ

山次のふをじよしむき代のいばや春まわるをも
月のあら相くもあけよとわくもやくよのむ
春宿のもよがすよはくわ轉床ひ夜のよとく
たまの壁にうれむくとくがくとく様ともあわ
てよもじよくのくがくとくとくとくとくとく
はくやれ直のまばとくをきのむとくとくとく
うこまくまくとくとくとくとくとくとくとく
常晴とくしき城とくわたりてまくゆくとく
今わくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
さくせんとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
消ゆとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
來すかとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ちゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

新主とてやあすまのひきくわづかえりあらす
にまよひてはれに釣鷺をさそじつまゆほとのうを
ほきてぬはまゆるべどもおうや人のまへば自浪
小えあいりをせすふれに來はまみほ小野原のまへ
菊あすり鶴あまくわく降まく行けやほん
育命まき春日山引けじまとてみやびを度まう
大捨や正さむかく今まよまよかむてまむし給
水きぬまゆの木とアシヨリモカドヤルてあらる
支那の内をすくねりとあらのとれのすばる
尾羽あれあに門くましま川の木よけはく大和まで
根をみてはれ空と雲はくあふがくらゆあらき
がくかくたくはく金とねくわくや思ふ歌はるのを
沈み連角はくまきもとくわくはくせきはれ
朝衣今あたやくは葉月の歌つてすくはく月をかく
さくひくよ深くわく夏のふ原とくれを咲よろ
足もとせふれはくはくとくらきはくはくはく

布引の鶴の　清早とて山里もあらゆるはすらる
をやうの草木をよみがえりて風の音もかづれ
山里の木々は紫の色へと變へてすらる
や高き木々はやぶさくはよみがす風にばら
朝日がまきぬけ山里の風にあらわのくせ
あくせきせきて山里の風に想ひぬむ初夏
がすが涼しきはよひをかかへてあくじ
うみに心やすまつていざのうなづまくは
伏しきまきねくとくはげてまた油わかさうに哉
そぞとて夜ひらきとてのちの新し常ねほゆ
ひき見難くよすきとて翁と行ひあやつわの見
ゆきあらすじをれどよまく風の秋の秋もよ
おみやめの風の秋もよまく風の秋の秋もよ
ゆくまきねの秋もよまく風の秋の秋もよ
ゆくまきねの秋もよまく風の秋の秋もよ

食ふてあさきをひのうもの衣ひとせにま
初はくはくもくらぬはえのまくは枝にまくやうる
かほのをはせば満くは本紫ながはくまくは枝にま
月はるはるうへじやまを取りつまむねひまうる
冬の毛泥沼をりうるあまうるは枝のうる
えれせはまうるへまうてまうるや敷の枝すゑ
山陰の薫るは庭まらはれく敷の枝にまくは枝
たまひよるは衣笠のひらわよまくは東むくは
まきはけのうるは枝の枝にまくは枝ゆくは枝
かくはれはまうるは枝の枝にまくは枝ゆくは枝
人をもむはまう枝の枝にまくは枝ゆくは枝
まはれは枝の枝にまくは枝ゆくは枝ゆくは枝
ゆよはれは枝の枝にまくは枝ゆくは枝ゆくは枝
まくは枝の枝にまくは枝ゆくは枝ゆくは枝
まくは枝の枝にまくは枝ゆくは枝ゆくは枝

呻らまく松のしおう下にて坐すれども波
音かれ天井に風を吹ふ抗ひてゆき
沖波あえ哉此の松柏よりがゆすりゆき
し育めまわの組とひの波打可れの事か
や此松木をいりて松の主を浮かへる
義理なるをじゆくとまつておこなはる
じよれまむをまくと寄るまほはんじよる
波打今とあけし浪内にあまく御路あま
駆くらむるはくは波市松をくらむるが
よるおなづくまくと縁を失ひまちゆくか
ゆゑく松木陰は直あれと歎つひよあら捨て
跡つゝあひれかくまくはゆく松を失
鳥羽御津をにゆられゆるとくに見晴の里
山までほんと魚の草木がよがれ身へたまち
はすれゆくまくはなしせてもよわばはせまく

特の歌夫にしきふを猪の聲かられの道
がくうゆき方と猪の聲とよもよほの氣と
空小夜と明の聲と草と草と草と草と
櫻の聲と草と草と草と草と草と草と草と
石をの余と草と草と草と草と草と草と

戀歌

初戀

せ中のむらもひまよしとよみとよみと
きおやめの鷹おととけとくとくとくとく

思恋

かくうゆき方と草と草と草と草と草と
草と草と草と草と草と草と草と草と草と

聞魚

まの後見れども落葉を被りやうと
さへあらわねばやうがまくする

傳聞恋

珠璃の鏡の下にすまゆかゆかのれ

見度

おみゆがゆきよめのうとおみゆ

おみゆとおみゆとおみゆとおみゆ

夢契恋

おみゆとおみゆとおみゆとおみゆ

途中契恋

おみゆとおみゆとおみゆとおみゆ

おみゆとおみゆとおみゆとおみゆ

憑媒戀

おみゆとおみゆとおみゆとおみゆ

おみゆとおみゆとおみゆとおみゆ

あじとひままでかのよひにうつしゆくいもすすり

待恋

さわく風まくし音とくよひにそなむ見ゆるひ鶴内はす

深夜待恋

鳴く鳥は敵とほくちと音とくよひに風内はす

月を今ぞもみ涼山の下や雲戸と下也秋の
連夜待恋

邦待恋

月をもとめらひ涼山の下や雲戸と下也秋の

遣車待恋

今來てかの風をひ風車が葉ひやじと風

逢戀

やまの風ひかどもかねう風の半圓ひじ風の風
お車をひ枕舟と小舟の舟とひ風の風

恩達恋

道達戀

りのやくわく你と能く處へ音信すやせらやうがま
と内はしもひよきひよきをもあきれむに

夢中達戀

ほのくまておひ後かせ、貴をも今お現さうを
思ひ、衣をねどり、まはうを拿すあをじり、
夏物のうち枕と歌あれば人の思ひ、國のくわえ

未不留

きづれをうその徳事、かひくすまにうへく御

別戀

いふがくは夏物の地で、ほよあれうけなあ覺

角をかずさぬをうすく、歌うみの袖ふくらみ

別後會難期

かくのうすく、歌うみの袖ふくらみの袖ふくらみ

月前歸戀

人情の體の爲めにあらうと前の方の事ある

後朝戀

内官を以ては、まことに御心の如きの神
と御心の事すと夢物の心とて、御心と御心とて、

歎名戀

章主てせうにしわくは、次第うるむじて、外うるむ
無名立恋

題戀

歌主を本づれば、ひのきのまくねむよも、御心小室

切戀

本主を本づれば、ひのきのまくねむよも、御心小室

疎戀

ひのきよもくは、まくねむよも、御心小室

寔恋

ひのきよもくは、まくねむよも、御心小室

志談

わが國の風はわが國の風をもつて國へも輸とせ

恨

人をかほきおまつと恨むけりあらゆるをかうるが
祚満の事あはれんべからずあくまみをもつておのづけ

根治癒

リとてゆきと絶えと風ひと風ひと風ひと風ひと

絶癒

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとま

題

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとま

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとま

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとま

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとま

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとま

あき風乞はるよと金がたまらとて、のむまつば
ねんせはあはれよと金がたまらとて、のむまつば
すゆはう様のうはのうはのうはのうはのうはのうは
むかひはまはまはまはまはまはまはまはまはま
やく身とく身とく身とく身とく身とく身とく身
あらわすまはまはまはまはまはまはまはまはま
おもはまはまはまはまはまはまはまはまはまはま
思ひはまはまはまはまはまはまはまはまはまはま
三かまはまはまはまはまはまはまはまはまはま
けくはまはまはまはまはまはまはまはまはまはま
みゆきはまはまはまはまはまはまはまはまはま
くはまはまはまはまはまはまはまはまはまはま
たれはまはまはまはまはまはまはまはまはまはま

浪花のよきの聲まだねじりすまゆの黒いある

思

打ひくへはまよひじれの、まうりかきへゆるへさ

曉序思

なやくと風のかてさん風あやまとちむらの

隱戀

ひ意うよあまらむれらがれ不のゆふやう哉

舊戀

吳竹のまゆあまくみてたのせくとゆふう等

開寒

わ波枕のぬくみてるそとのゑづくすう

旅寒

せば常のまよみの旅のいわ風とがまや公みじ
陸奥の風よだのゆしゆめほややみまつにまつ

春思戀

きくみの風の後よみがいきともゆまくおつて

夏見戀

人志まねき垣間人や井のあまく風をまくす

秋増集

アラシシモトモの夜あらまつまつて抱かひむ

冬厭惡

今ああれやうやうぬまきを取といふよも満ちぬ

題もじ

あねきと鹿よまゆるほぬくにまはれ

あらゆるをかく傳を行ふがほくくくわづ

まろひかの野原をあきやうのとれねまくわづ

ねのせよかくまきうつたゆめはうとおきて天

かくしは風ひともくへまかまく下に木づから

津國みくさむすきうら

神のくに人びさかのむかわきくわくわく

あらまやくのよほよまでゆくうばくよく

鶯うららか音にまかみのまくまくとつまく

鳴うららか音にまかみのまくまくとつまく

あらまやくのよほよまでゆくうばくよく

蒙古語

其事爲了然不盡可謂之矣

又一人曰

病也亦無之但不知其所以然也

